

第五章 若き官僚として

大正七年（一九一八年）から始まった政党内閣は、基本的には議會主義と英米協調主義の路線を堅持したが、これに不満な軍部勢力は、昭和時代に入るや、いくたびかのテロで、その存立を脅かし、ついに、昭和十一年（一九三六年）二月二十六日未明には、皇道派の青年将校が、国家改造を目標んでクーデターを起こした。彼らは折柄の雪を衝いて、首相官邸や要人私邸を攻撃した。岡田啓介首相は危うく難を逃れたが、高橋是清蔵相を含む多数の政府高官が殺害された。いわゆる二・二六事件である。反乱軍は数日で鎮圧されたが、この事件は、その後の日本が軍国主義の道へ大きく踏みこむ重大な契機となった。

事件によって瓦解した岡田内閣のあとを受けて、広田弘毅新内閣が成立したとき、高橋蔵相の後を受けて入閣したのが、馬場銚一貴族院議員である。彼は陸軍の予算要求を容れるため、公債漸減主義の放棄、増税、低金利政策の断行などを打ち出し、それまでの高橋健全財政路線を放棄した。

馬場蔵相は、津島寿一次官ら高橋財政を支えていたグループを退けて、省内に新勢力の形成をはかった。準戦時体制への転換が大蔵省にも及びはじめたのである。

大平は、津島次官が退官すると知って、あわてて大蔵省へ行き、津島に会ってたずねた。

「津島さんは今度お辞めになるそうですが、私の方は大丈夫でしょうか。」

「何を馬鹿なことを言っとるんだ、ちゃんと卒業できるように勉強しておけ」と津島は答えた。

こうして大平は、この年の四月十日、大蔵省に入省することになる。

「新調の洋服に希望の胸をふくらませた十人の新入学士は、大蔵省で勢揃いして大蔵大臣官邸に行った。……時の蔵相は馬場鎧一氏であったが、馬場さんは愛想のよくない表情で、一同に次のような訓示をされた。諸君は大学を卒業したのだから、学問するのはこれでおしまいだという心根であってはならない。これから本当に学問を始める意気込みでなければならぬ。英語では卒業のことをコメンズメント（始まりの意）というが、これはいみじくも言った言葉だ」というような意味のものであった」。

大平は後年、高橋是清を讀める二、三の文章を草しており、高橋路線を排した馬場蔵相には好感情を抱いてはいなかった。右の文章の「愛想のよくない表情で」というくだりに大平の馬場蔵相に対する感情があらわれているが、「卒業のことをコメンズメント」という言葉は印象に残ったらしく、大平はのちに、社会人一年生の集まりなどに出ると、しばしばこの英語の意味を説いて、彼らの戒めとしたものである。

大蔵省では、日本の準戦時体制化のための政策立案が急がれており、そのため外国の財政政策、とくにナチ政権ができて間もないドイツの政策に関する大がかりな研究が始まっていた。大平は理財局に属したが、理財局長は、それまで主計局長をつとめ、馬場体制のありを食って更迭された賀屋興宣だった。その下には、岡田啓介前首相の秘書官をつとめていた迫水久常（のち経済企画庁長官）がおり、さらにその下に、森永貞一郎（のち日銀総裁）と伊原隆（のち横浜銀行頭取）がいた。

森永は次のように言っている。「賀屋さんからの特命で、いろんな企画をやり、ドイツの政策勉強もしたのですが、私と大平さんがコンビを組んで取り組んだのは、主に原料政策でした。大平さんは、向こうの文献などを読んで、非常にしっかりした報告を出してこられました」。

『馬場財政』は満州事変以来展開された大陸政策を既成事実として容認し、これに即応する国防充実に要

する経費を認めるとともに、当時の軍が主張する国防理念に同調して、この見地に立つ国力伸張、経済力培養に要する経費をも認めて行くというものであった。

これは当然、公債の発行、国税収入の増加を意味し、馬場蔵相はこのため、「中央、地方を通ずる税制の改革案」と称するものを立案した。大蔵省は全組織をあげてこの案の作成に取り組んだので、夜の十一時、十二時まで電灯を灯して作業がつけられ、「電気局」と称された。

しかし、大平自身によると新入組は、将来の幹部になるのにそなえて、「半分勉強、半分遊び」というような生活をしていた。

「……昼食がすむと一同は、宮城に沿ったお堀端を散歩したり、……玉突屋で玉突に興じたりしたものである。一週に一度は昼食を共にした」。しかし、「……毎年七月には、大蔵省で大異動が行われる。二年学士の連中が、税務署長とか専売局の副参事に任命されて、巣立って行くと、一年学士の責任が重くなってくると、しょっちゅう玉突や麻雀に興じているわけにも行かなくなる。又恋人ができたり、家庭をもつものも出てくる。必ず出席していた読書会に怠ける者も出てくる。かくて徐々に俗物になって行くわけである。」

入省して一年たつと、次の新入組が入ってきた。この中には村山達雄（のち大蔵大臣）、佐藤一郎（のち経済企画庁長官）などの酒豪がいた。一年先輩の大平たちが、「読書会」などでこのグループの面倒を見ることになった。

読書会では、マルクスの『経済学批判』、ヒルファーディングの『金融資本論』、ワーゲマンの『景気変動論』、山田盛太郎の『日本資本主義分析』、ケインズの『貨幣論』などをテキストとして勉強もしたが、もう一つの楽しみもあった。

村山達雄によると、「読書会というのは、つまり『飲む会』でして、……この読書会を中心に、縦の系列で、一年先輩が順次にひきまわして省内を案内する。それから、歓迎合をやって二次会に連れて行ってくれるわ

けです。われわれの時の二次会は銀座の某小料理屋でした。……とにかく酒はうまいし、美人ばかりだったから、われわれのんべえは大いに気に入って、明るく日から毎日通ったものです。大平さんは、酒は強いのに、そんなわれわれにいつも付き合ってくれました」。

佐藤一郎の回想は次のとおりである。

「昔は夏の間は半ドンだったから、返子の魚屋の二階を借りて、十二時に役所がひけると毎日、返子へ行って泳いだり、遊んだり、本を読んだりして、泊り、そこから役所に通うという合宿生活のようなこともしました。大平さんもたまには付き合ってくれましたね。その頃の大平さんは、しゃべるよりも聞くというタイプでした。それから、非常に読書家でしたね。経済よりもむしろ、哲学や文学なんかを読んでいた。表に発するより内に蔵することに力を注いでいた青春だと思います」。

入省の翌年（昭和十二年）の四月、大平は鈴木三樹之助の次女志げ子と結婚した。「平凡な見合い結婚であった」と彼自身が記している。三月初旬に見合いが行われ、四月十五日に東京商大時代の師上田辰之助教授の媒酌により東京会館で挙式というスピード結婚となった。

鈴木三樹之助は、岩手県東磐井郡薄衣村（現在の川崎村）の出身。生家は、その地で醤油醸造業を営んでいたが、東京へ出て、三木証券を設立した実業の人であった。志げ子は大正五年十一月二十日、東京市本郷区田町の生まれ。芝区の私立南高輪尋常小学校（現在の森村学園初等科）を経て、本郷の桜蔭高等女学校（現在の桜蔭学園）を卒業し、花嫁修業の最中であった。

この結婚に当たって、大平は王子製紙の加藤藤太郎に報告に行ったところ、加藤は「君は貧乏のようだが、結婚式費用の少なくとも半分は自分で支払うように」と言って、八百円の金を大平に渡した。大平の初任給が七十五円であったことから、八百円という金がどれほどの大金であったか想像がつく。

大平は、結婚後、杉並区和田本町に新居をかまえたが、落ち着く間もなく、その年、七月一日の異動で、一年三月月の判任官暮しに別れを告げ、高等官七等に任ぜられ、横浜税務署長を命ぜられた。

当時は、高等官と判任官の間には截然たる区別が存在し、食堂や便所すら異なっていた。また身分上だけでなく俸給にも大きなへだたりがあった。大平の給料は判任官時代の七十五円から倍近い百三十七円に上がった。私立大学卒の新入社員の初任給が五十円そこそこ、住込みの工員の月収が五円という当時である。しかし、後輩にたかられることの多かった大平の家計の切盛りは、お嬢さん育ちだった志げ子にとって、決して楽ではなかった。そんなときに面倒を見てくれるのは、やはり義父三樹之助であった。

大平が横浜に赴任したのは、七月七日、その後、日中戦争に発展する蘆溝橋事件が起こった日のことである。大平の目にうつった横浜は次のようなものである。

「横浜といえば、いつでも名古屋と神戸が引き合いに出されるが、その当時の横浜は、経済的にはこの両都市のはるか後塵を拝していたことが、税務署の窓から見ても明らかであった。ただ、浜ッ子という共通の意地と誇りが、市民の間に脈々と残っていた。またアメリカ人、中国人をはじめインド人、欧州人などが多く住み、関内には、エキソチックな雰囲気漂っていた。英国の総領事館では、時おり礼装によるパーティーが開かれ、私なども何度か招待を受けた。」

横浜税務署は、東京、神奈川、千葉、山梨、埼玉、栃木、群馬の一府六県を管轄する東京税務監督局下の六十四の税務署の一つであった。それまでは横浜市には一つの税務署しかなかったが、大平の赴任と同時に新たに神奈川税務署ができ、税務署の規模は縮小した。職員数は約八十名程度。二十七歳の大平署長は、ここで、前任者から事務をひきついだ。

この頃の署員の思い出によれば、大平は、当時の署長が同行することのなかった署員の旅行に一緒に行つて、一緒に酒を酌み交わしたり、海水浴に行つてはみんなと一緒にふんどし一つになつて泳いだり相撲を取

ったりした。滞納整理のため、店のショーウィンドーにはられた差押えの封印を、大平が気の毒に思つてはがしてきたことを覚えていゝるものもある。

そして、この年の十月二十五日、東京税務監督局の直税部長に就任したのが、のちに、内閣総理大臣となる池田勇人であった。池田は、明治三十二年広島県豊田郡吉名村の素封家に生まれ、熊本第五高等学校を経て京都帝国大学に進み、大正十四年に大蔵省に入省した。東京税務監督局直税部長となる前には主税局に勤務していた。

税務監督局の直税部長とは、管内の税務署長の元締めで、税務署長の手にあまる問題はすべて直税部長に持ちこまれた。当時の池田は、大蔵省きつての酒豪であるという評判と、税金の取立の「鬼部長」という渾名をもらつており、落葉性天疱瘡という奇病のためにおくれた出世街道をまっしぐらに駆けのぼつてゐる最中だった。大平署長はしばしば上司の池田のもとを訪ねなければならなかつたし、また池田も時折、横浜税務署に出むいてきて、徴税指導にあたつた。池田と大平の運命的な結びつきは、この時をもつて始まつた。

まだ二十代の半ばを過ぎたばかりの大平署長であつたが、いまや身分は八十数人の部下をあずかる責任者であり、リーダーとしての役割を果たさなければならなかつた。また、それこそが、大蔵省が若い高等官に期待するところであつた。

税務署長になつてはじめての正月、大平は新年拝賀式で署員一同を前にして一場の訓辞を述べた。その内容は次のようなものである。

「行政には楕円形のように二つの中心があつて、その二つの中心が均衡を保ちつつ緊張した関係にある場合、その行政は立派な行政と言える。……支那事變の勃発と共にすべり出した統制経済も統制が一つの中心、他の中心は自由というもので、統制と自由が緊張した均衡関係に在る場合、はじめて統制はうまく行くのであつて、その何れに傾いてもいけない……税務の仕事もそうであつて、一方の中心は課税高権であり、他方

の中心は納税者である。権力万能の課税も、納税者に妥協しがちな課税も共にいけないので、何れにも傾かない中正の立場を貫く事が情理にかなった課税のやり方である」。

この訓示について大平は、『当時としては随分とませた事を言ったものだと思う』と記しているが、ここに述べられた『楕円の理論』は、その後も生涯にわたって、彼の行動を支える哲学の重要な柱の一つとなった。なお、昭和十三年二月六日、磯子区の芦名橋近くの借家で長男正樹が誕生した。

昭和十三年六月二十五日、大平は仙台税務監督局（現国税局）の間税部長を命ぜられ、一週間ほどして横浜から仙台に赴任した。

「（仙台での）私の仕事は間接税（酒、織物、揮発油、砂糖、印紙その他にかかる消費税）に関するものであった。ところが東北地方はこれといって大きい工場もなければ民度も高くないので、間接税の財源は多くなかった。唯お酒だけは、秋田、岩手、宮城、山形等、相当天下に聞えた銘醸地を抱えていたので、酒の税金が一番大きい財源であった」。

そして、この酒税にまつわっていたのが『どぶろく退治』という困難な仕事であった。

東北の農村地帯における酒類の自醸自飲の生活風習は、遠く藩政時代にその萌芽を見ることができ、明治三十二年より「酒造税法」の制定によって、自醸自飲の制度は全面的に禁止された。

当局は、財政収入の確保と自醸自飲の弊風肅正のため本格的な密造犯取締りに乗りだしたが、すでに長い生活慣習と化した密造をなくすことは容易ではなく、昭和初期までは、間税部の密造対策は、『検挙に勝る矯正なし』という格言があったほど取締り中心主義であった。

しかし、昭和七年に、秋田県で密造検挙のさい、老母が逃げようとして転倒して死亡し、騒ぎとなった事件があって、それ以来、『検挙』だけではなく、『指導』にも重点が置かれるようになっていた。

このどぶろく退治について、大平は、「これは、大げさに言えば税務官庁の所管事項を外れた仕事で、どちらかと言えば、政治的な仕事であり、衛生的見地からも、社会風教上の観点からも、或は又、社会政策的立場からも、色々の問題を含んだ奇妙な仕事であった」と書いている。

大平は間税部長に就任してから、酒類密造矯正会を東北六県に拡大し、総会に出席する人々も広く各界に求めるとともに、『酒類密造矯正施設一般』と題する二百ページほどの本を編纂して、矯正運動のPRにつとめた。

しかし、当局の度重なる取締りや矯正会の努力によつても、酒類密造はいっこうに減少しなかつた。密造が発覚すれば、型どおりに調書がとられ、罰金を科せられるが、重い場合には体刑となつた。罰金を払うために娘を売るといふ哀話も聞かれたし、体刑の場合はたいてい老人が犠牲にされた。彼のちに、この密造取締りについて次のような感想を述べている。「東北地方におけるかような貧乏な百姓は、国家の恩恵を殆んど全く受けない反面、徴税という名においてかかる桎梏に苦しんでいるのである。この国に住んでいるばかりに、かように苦しまなければならぬということは何たる悲しい運命であろうか。私は国家とか国法といふものにまとわる冷厳な約束というものに、ある種の反発を感じた」。

この当時の間税部長の仕事には、どぶろく退治のほか、当時、支那事変がだんだん本格化してきていたのを反映して、酒類生産統制ならびにこれにともなう酒屋の転廃業問題があつた。大平はこれに関しても、民間の業者の立場を十分に理解して東京の本省に對して、さまざまな陳情の手助けをしている。

大平が大学を卒業して以来三年余、この間に彼の生活はそれまでと大きく変わった。判任官の見習い時代はともかくも、高等官で地方に出れば、その地の名士と對等に付き合う間柄となる。収入も民間の同年次の卒業者の三倍近く、料亭などでも署長さま、部長さまと下へも置かぬもてなしをされる。それが戦前社会におけるエリート官僚の実態であつた。こうした環境にあつて大平は、一方では聖書や学問に親しむ生活をつ

づけつつも、他方ではこのエリートの立場をエンジョイすることを忌避したわけではなかった。それほど頻繁ではなかったが、酒席に顔を出すことを避けようとはしなかったし、地方の名士たちと付き合うことを楽しみました。

その間に、大平の内部では、苦しい農村生活や学生生活の中では自らも他人も気づかなかつた一つの資質が発芽して、成長をみせていた。それは、日本の社会のいかなる構造にも、柔軟に対応して行ける、いわば「政治的」とも言える資質であつた。入省同期のものに比して、高等小学校の一年に加え、高商時代の休学一年、そして大阪での苦渋に満ちた社会生活一年を経たことも、そうした幅広い人格を形成するのに寄与したことであらう。

仙台生活も一年近くになろうという昭和十四年五月のある日、大平は突然、大野竜太大蔵次官から、至急上京せられたという電報を受け取つた。

「翌日東京に着いた私は恐る恐る次官室に大野氏を訪ねた。大野次官は、山際（正道）秘書課長（のち日本銀行総裁）と同席で、『ともかく三人で飯を喰いに行こう』と言い出した。何のことやら分らぬ私は、狐につままれたような気持ちで素直にお伴した。何でも芝公園の入口にある、とある割烹店に連れて行かれた。食事も略々済んだ頃大野次官は、『こう言い出した。』

『君一つ支那の方へ行つてくれないか。今度政府で、北京、上海、張家口、厦門の四力所に、興亜院連絡部を設ける事になった。各連絡部には大蔵省から夫々人を派遣することになっているが、君には張家口に行つて貰いたいのだ。張家口というところは、夏は涼しく、冬は暖かいし、どちらかといえば住みよいところだ。それに、君が行けば、内蒙の大蔵大臣のようなもので、白紙に絵を書くように何でも仕事が出来る。若い時には方々を見ておくものだ。どうだ一つ聞いてもらえないか』と。

私は、これは大分おだてられているなあと思つたが、御馳走になつた手前即刻お断りすることも出来ないので、「一つ考えさせていただきましょう。家族の者とも相談の上、後日御返事を申し上げます」と答えて辞去した。帰り途大きい支那の地図を買つて、張家口の立地を調べてみたり、まだ見ぬ支那大陸に想像を逞うしたりしたが、結局、「若い時は方々見て置くことだ。北京や天津には、既に友人も先発して行つておることだし、寂しくなれば北京に出かけることも出来る」と思い直して、翌日、仙台にいる家族と相談することもなく大野次官に「諾」の回答をした」。